



『部族』における「照応」・「一致」と「対立」・ 「分裂」のモチーフ

島津, 厚久

(Citation)

近代, 126:75-95

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481780>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481780>



『部族』における「照応」・「一致」と 「対立」・「分裂」のモチーフ

島 津 厚 久

序

バーナード・マラマッド (Bernard Malamud 1914-1986) の長編『部族』 (*The People* 1989) は、未完成の状態で作家の死後に出版されたという事情も手伝って、研究書や論文で本格的な考察対象とされる度合いは少ない。そんな中でも、サラ・フィリップス・カスティール (Sarah Phillips Casteel) は、同じアメリカ中西部を舞台にしているということで長編第3作『新生活』 (*A New Life* 1961) と関連付けてこの作品を論じたりしているが (*Second Arrivals*. 76)、『新生活』が中西部の架空の町を背景としているのに対して、『部族』においては、ミズーリ、ネブラスカ、ワイオミング、アイダホ、オレゴン、ワシントン、モンタナと、主人公のロシア系ユダヤ人ヨジップ・ブルーム (Yozip Bloom) は実在の州を経巡っており、また、ストーリーの中核に座しているインディアンとアメリカ軍の対立というテーマも、エドワード・A・エイブラムスン (Edward A. Abramson) やフィリップ・デーヴィス (Philip Davis) が指摘しているように、19世紀後半に実在したネ・ペルセ (Nez Perce) インディアンが辿った運命を下敷きにしていて (Abramson 139, Davis 341)、その分、本作品は現実感に富むものとなっている。

本作品を読む時、インディアン (braves) とアメリカ軍 (soldiers) の対立が否応なく目につくが、詳細を検討していくと、例えば、インディアンの酋長となり、名前もヨジップからジョジップ (Jozip) へと改めた主人公 (今後、酋長になる前のブルームのことをヨジップ、なった後の彼をジョジップと呼ぶ)

の、「(和平の申し入れに來た) インディアンを竹の檻に入れるなど法に反している」(91) という主張に応える形でアメリカ軍の某将軍が彼のことを正当に扱って解放してみせる場面など、対立とは逆に照応や一致を印象付ける筋立てもしばしば見受けられる。結論を言えば、その内部に様々な形で埋め込まれた対立・分裂のモチーフと照応・一致のモチーフが本作品の骨格を成しており、作品内の技巧的要素として自己主張している。

カスティールは、ジョジップの「インディアン性」について、「白人社会」、「部族の構成員達」、「自分自身」(*Second Arrivals*. 76) から疑問の視線を向けられると述べているが、本稿ではそれに沿う形で、以下、目まぐるしく展開する照応・一致と対立・分裂のモチーフの諸相を、「赤」という色彩イメージを中心にインディアンとアメリカ軍の関係という観点から、次いで、これも作品のテーマとして大きな部分を占めるインディアンとユダヤ人の関係という見地から、更に、インディアンでもありユダヤ人でもあるジョジップの内面に関連づけて瞥見し、最後に、本作品と他のマラマッド作品の比較という立場も加味する形で、本作品の一貫した技法について紹介していきたい。もちろん、照応や対立にしろ、カスティールがあげた上記三つの観点にしろ、截然と切り分けができるものではなく、それらが多様な次元において相互に複雑に絡み合いながら作品を進行させていることは言うまでもない。

1. インディアンとアメリカー「赤」イメージを中心に

インディアンが「赤」イメージで形容されることは周知の事実であり、本作品においても随所にそういった言及が見られる。「部族」に入るにあたり、一種の通過儀礼として、つまり、「赤い人」になるためにヨジップに求められる弓矢の技が、人の頭の上に置かれたリングを射するというものなのであるが、そのリングは“red apple”(23)とされている。普通リングは赤いもので、それに敢えて「赤い」という形容詞を付けることでインディアンと「赤」の関わり

が意識的に強調されている。そういう“the red man” (44) としてのインディアンとアメリカ側との対立が、前述のように、この作品の大枠を成すテーマである。時代は南北戦争後の 1870 年、かつてアメリカ政府との間で契約を結び、「部族」はアイダホ州内にある居留地で長年暮らしてきたが、この頃になると、近くで金が発見されたこともあって、白人入植者達が頻繁に土地を犯すようになり、遂にはアメリカ政府も、そこからインディアンを追い出して自分達の領土を拡張するべく力で威嚇するようになる。それに反発を感じながらもインディアン達は新天地を求めてカナダへの集団脱出を企て、それを阻止しようとするアメリカ軍との間で凄惨な戦闘が繰り広げられることになる。イヴリン・エイヴリー (Evelyn Avery) は、インディアンのことを「思いやりのある犠牲者」、アメリカ人 (軍) のことを「貪欲な殺人者」(Rev. 122) と定義づけているが、そういう敵対関係の一方の頂点にいるアメリカ大統領グラント (Grant) がインディアンの側からは“the Great White Father” (44) と呼ばれ、さらに、大統領のみならずアメリカ軍の兵士達にも、“the blue coats”、“white soldiers” (69)、“the blond soldiers” (78)、“the palefaces” (86) と、赤以外の色が敢えて付されており、色彩イメージを効果的に使用することで、両者の対立関係が表現されている。

兵役を逃れてロシアからアメリカに渡ってきたユダヤ人ヨジップがワイオミング州からアイダホ州まで馬に乗って無気力、無目的に漂い流れてくる場面から作品は幕を開けるが、冒頭わずか 4 行目で、彼が「二週間に一回赤い髭 (his reddish beard) を整えた」(3) という件が出てくる。インディアンとアメリカという図式の中で物を言うと、この「赤い髭」はインディアンを象徴する「赤」に照応するものであり、後に「部族」の酋長となってアメリカ相手に戦うことになる彼の運命を予告する。現に、もともと赤かった髭に加え、「部族に加わって以来ヨジップの髪は茶色がかった赤 (brownish red) へと変わっていた」(29)。この赤を介して彼とインディアンの一体性が明示されている。

そのヨジップが、正式に「部族」の一員となった後、英語が話せるという理由で「部族」の酋長であるジョセフ（Joseph）に依頼されてワシントン D.C. に赴き、そこで「部族」を代表して、起ころうとしている追い立てをやめさせるべく「インディアン問題担当長官」（the Commissioner of Indian Affairs 27）相手に交渉することになるのだが、交渉は平行線で、インディアン側とアメリカ側の主張の対立が露わになるだけで終わる。平行線以上に、長官の話術の巧みさと洞察により一方的にヨジップが押し込まれている感が強く、最後には“please”（33）を連発して、交渉というよりは懇願に近い状態となり、それもはねつけられて会見は打ち切りとなる。

優劣差の下にあるこのような対立状況を予示するものが、本題前に交わされた雑談の中に見出せる。前述の、矢でリングを射るという武芸を競う中で、対戦相手インディアンヘッド（Indian Head）の放った矢がヨジップの鼻をかすめて傷つけるという一幕があり、長官がその傷のことを指摘するとヨジップは、「血が止まったらもう痛くなくなった」という返事をするのだが、その際に、“When it stopped to bleed”（31）という文法的に誤った英語を用いてしまう。それに対して長官は、「お宅の酋長のところにはきちんとした教育を受けた（decently educated）者が複数いたと思うが・・・それなのに何であんたが代表役に選ばれたのか説明してくれんかね」（31）とすかさず返し、「自分は教育のある人間ではない（not an educated man）」（12）という劣等感をヨジップは改めて味あわされる。実際ヨジップは口ごもった挙句「酋長にお前ならできると言われたから」（31）と返答するのがやっとなのである。その後も長官は「でも、酋長も英語を話すと思うが」などと述べ、さらにヨジップを辱める。“educated”と“not educated”という単語がここで放つ対立イメージが、優劣差の下にある対立というその後の展開の伏線となっている。あるいは、本題と本題前の雑談がその本質において照応関係にあるという言い方もできる。後述するように、本作品においてはこのような「対立」の「照応」というパタンも多くみられ、「序」

において「相互に複雑に絡み合いながら」と述べた所以である。

アメリカ側にいた某将軍がジョジップの正当な主張に呼応する形で彼のことを正当に扱い、解放したという件については先に述べたが、その将軍はインディアンと同じ“a red bearded man” (91) とされていて、まさに、「赤」の照応がイメージ面でこの場面を補強している。アメリカ側にはもう一人「赤」イメージを付された人間がいる。それが長官の娘ルシンダ (Lucinda) で、“the young redheaded woman” (33) である。彼女は去り際のヨジップに花を贈り、父親からたしなめられるのだが、実は長官との面会前に二人は顔を合わせており、その際ルシンダは「興味を引かれて彼の方を見詰め」、ヨジップの方も「彼女に話しかけたくなくなった」(30)。花の贈呈へと昇華した、立場の違いを乗り越えての二人の交感が赤イメージの照応という形で具現化されている。

インディアンの酋長ジョゼフの一人娘ワンブロッサム (One Blossom) は、自分達の部族の歴史について、「部族が二つに分かれた時、私の父は南の方の部族 (the lower tribe) の長となり、今、私達はこの長い谷にいる単一の部族」(17) とヨジップに語っている。これはネ・ペルセ族の実際の歴史と重なるものでもあるのだが、ここでは、作品内の表現技巧の一環として部族の「南」とのつながりに着目したい。「部族」が南に端を発するその一方で、アメリカ軍の側においては、兵士達は “bluecoats” (69)、“blue-coated soldiers” (76) であり、彼らを束ねるガンサー大佐 (Colonel Gunther) は “blue military cape” (44) をまとい、といった具合に、直近の南北戦争における北軍側の服装の特徴がことさらに強調されており、現にストング将軍 (General Stong) については、「南北戦争を戦ったことがある」(76) と直接的に戦争との関係が言及されている。「部族」の「南」とのつながり、アメリカ軍の「北」との関係という形においても両者の対立が示唆される。アメリカ軍の「青」イメージは、先に言及した「赤」イメージとの対比ということ以外の次元においても機能しているのである。

付随的な言及ではあるが、方角が効果的に使われている事例がもう一箇所あり、それは、酋長ジョゼフの埋葬の場面である。ジョジップら数人のインディアンが酋長の柩を墓穴に下した後、後ずさって元の位置に戻るという場面なのであるが、その「後ずさり」の動作が、例えば、某和英辞典にあるような“moved back”などではなく、「顔を東に向けた状態で西に歩いた」(39)と表現されている。これなども、先の「南北」同様「東西」という形の対立概念でもってストーリーを語っており、本作品の基本構造に合致する表現方法といえる。

II. インディアンとユダヤ人 (1) —ユダヤ史との照応

マラマッドには「最後のモヒカン」(“Last Mohican” 1958)という短編がある。登場人物はユダヤ人ばかりの物語にこのような題名をつけるということ自体、ユダヤ人の運命をインディアンのそれと重ね合わせる、あるいは、ユダヤ人のメタファーとしてのインディアンという発想が早くから作者には存在していたということが分かる。それを除いても、『部族』に描かれたインディアン達の姿とユダヤ人の歴史の諸相との間の類似性を指摘する研究者は存在する。

例えば、エイヴリーは、ヨジップがインディアンに引き付けられたのは、「新世界でアイデンティティーを模索するユダヤ系アメリカ人という迷える種族として」(*The Magic Worlds*. xvii)であると言っている。また、カスティールも、イディッシュ訛りゆえに自分の「アメリカ性」を疑問視されたユダヤ系のヨジップが非アメリカ市民として扱われるインディアン達に共感し、一体化したという趣旨のことを述べている(*Canada and Its Americas*. 110)。もう少し細かな点を見ると、エイブラムスは、インディアンの酋長の呼称として用いられる「ジョゼフ」は旧約のヨセフと重なるものであり、「大きな混乱を経験している民族集団を救うことを試みた」(139)点で共通すると述べているし、デーヴィスは、ジョジップに率いられてカナダへと向かうインディアン達の姿について、

「新たなモーセ (Moses) に率いられた迷えるユダヤの民」(341) のようであると言っている。さらに、作品最終場面、刀折れ矢尽きて降伏したインディアン達が貨車に乗せられて移送される様を描いた箇所、エイヴリーは「ユダヤの歴史」(Rev. 121) を、エイブラムスンはもっと直接的な言い方で「ホロコースト」(140) を見ている。付言すると、インディアンの敗北について、「神が顔を背けられた」(96) という記述が本文にはあるが、これは、「自分が選んだ人々と特別な契約に入った全能で慈悲深い神が、どうしてこんなことが起こるのを許したのか？」(Werblowsky and Wigoder 331) という、ホロコーストの被害者たるユダヤ人達の叫びと通底するものがある。

このように、インディアンとユダヤ人の間の照応関係は既にいくつか指摘されているが、ここでは、識者に続く形でこの照応について若干の追加を行いたい。

「部族」もユダヤ人も、唯一存在としての神への信仰をその価値観・倫理観の土台に置いている。自分達の神が発する言葉について酋長ジョゼフは、「煙と火の言葉 (words of smoke and fire)」(15) と言う。この「煙」そして「火」のイメージは、ユダヤ教でいうと、例えば、モーセがシナイ山で十戒を授かった場面に対応する。ここで「例えば」と言ったのは、エリック・コーエン (Eric Cohen) とミッチェル・ロクリン (Mitchell Rocklin) が指摘しているように、ユダヤ教の伝統には十戒以外にも火や煙のイメージとともに語られる物語や執り行われる儀式が頻出するからである。十戒授与の場に関して言うと、旧約聖書、出エジプト記 19:18 は、その模様を、「そして、シナイ山は完全に煙 (smoke) に包まれた。なぜなら神が火 (fire) をまとしてその上に降り立ったからである」と叙述している。この煙と火を背景にユダヤの神はモーセに直接言葉をかける。ユダヤ系のアメリカ人作家ハーマン・ウォーク (Herman Wouk) は、十戒を得た後のユダヤ人のことを、「もはや信仰によって束ねられた部族ではなく、制定法の下で暮らす国民であった」(9) と述べ、煙と火に導かれたこの

一連の出来事がユダヤ人の歴史の中でも画期を成すものであることを指摘している。このように、ユダヤ的価値観、存在様式の核ともいべき神授の律法と深く関わる二つのイメージをインディアンの神も帯びることで両者の照応関係は揺るぎないものとなる。

「部族」がかつて二つに分裂し、今の「部族」はその南半分の系統であるということをワンプロッサムが述べる件は先ほど紹介した。ここにもユダヤとのつながりを読み込むことができる。古代イスラエル王国はソロモン (Solomon) の死後、北のイスラエル (Israel) 王国と南のユダ (Judah) 王国に分裂し、イスラエルがアッシリア (Assyria) に滅ぼされた後は、南のユダ王国が唯一のユダヤ人国家となった。その後もバビロン (Babylon) 捕囚など苦難を舐めさせられたが何とか生き残ったユダの住民達は帰還を果たし、今のユダヤ人へと命脈を保つことが可能となった。(ちなみに“Jew”という英語も語源は「Judah の人」を意味するヘブライ語“Yehudi”へと遡る。) こちらの事例もユダヤ史においては重要な転換点であり、史実に基づくとはいえ「部族」が分裂したのが東西ではなく南北であり、「部族」の関係先が北 (upper) ではなく南側 (lower) にあると設定されることで、「部族」とユダ王国との照応性が喚起される。インディアンと「南」との関わりは、先述したような、アメリカ軍の「北」に対するアンチテーゼとしてのみならず、ユダヤ史との照応機能をも果たしている重要なモチーフである。

旧約との照応についても一言しておく、ジョジップの同士でもありライバルでもあるインディアンヘッドのことをワンプロッサムは「鷲と戦う者 (He who fights eagles)」(17) と称している。旧約において「～と戦う者」に相当するものを探すと、ヤコブ (Jacob) が見知らぬ男と「組み合った」(wrestled) という創世記 32:24 の記述に行き当たる。そのことゆえにヤコブは「神と戦う者 (He Who Fights with God)」(Werblowsky and Wigoder 3581) という称号を与えられる。このようなヤコブとの対応性はジョジップにも見出せる。

ジョジップはある日、「死と組み合っている (wrestling) 夢を見」(75) ている。戦うヤコブのイメージを共有するジョジップとインディアンヘッドの一体性は、ヨジップが新酋長となることをインディアンヘッドが後押しした場面(37)、「我々の心は一つだ」(63) というインディアンヘッドのジョジップに対する声かけ、ジョジップに取って代わったらというインディアン仲間からの勧めを断るインディアンヘッドの対応(94) など、降伏直前まで維持された両者の絆に通底する要因である。その意味で、「赤」の共有がヨジップとインディアンの一体性を象徴するのと同様のパタンと言える。ちなみに、降伏を決定する最後の首脳会議において、それを良しとしないインディアンヘッドではあったが、それでも、直接ジョジップと対立し、訣別するのではなく、降伏というジョジップの決定に異を唱えない副酋長達への軽蔑を示すという形のみの自己主張に留めている(97)。

マラマッド自身あるインタビューの中で、自分が旧約・新約の聖書に影響され、強制収容所のユダヤ人達に心動かされたと述べており (Lasher 63)、その関心の一端が本章で述べられたいくつかの照応関係に投影されているように思う。

III. インディアンとユダヤ人 (2) —ヨジップとジョジップの対立性

インディアンの酋長となったジョジップは、「自分が引き受けた大義は、以前の孤独な人生において自分に欠けていたものを理解する手引きとなった」(41) という思いを抱く。つまり、インディアンになる前の彼(ヨジップ)となった後の彼(ジョジップ)との間には、あるいは、インディアンになる前のジョジップとインディアンの間には、その存在のありように関して隔たりがあるということであり、それは対立のモチーフで捉え得るものである。

ヨジップ時代のジョジップを特徴づけるのは無気力と無知、無目的である。ミズーリ、ネブラスカ、アイダホ・・・と一人放浪を続けるヨジップであるが、

新しい場所に行きたいという渴望が何に由来するかは「分からなかった (had no idea)」(4)。ちなみに、「序」においても述べたヨジップのこの動きは基本的に東から西に向かうものであり、彼もかつてその一人であった、アメリカを目指すロシア系ユダヤ人達のそれを想起させる。あるいは、マラマッド作品に限定して考えると、カスティールも言及していた『新生活』の主人公サイ・レヴィン (Sy Levin) がニューヨークから中西部へ、さらに太平洋を目指して移動して行くさまとも重なる。ただ、ヨジップの無気力さは、生きながらえるための決意を込めたユダヤ人達のアメリカ行きや、職をなげうってでも新たな伴侶との新生活に踏み出すレヴィンとは似て非なるものである。方向性是一緒でもその内実は対照的であり、比較を通して今のヨジップのありようが一層強調される。さらに、旅の途次、ヨジップは自然愛を益々感じるようになるが「なぜなのかは分からなかった (wasn't sure why)」(4)。その後も、自分では説明できない (could not explain 5) 運命を自分の中に感じた。頑張れば一角の人物になれると思うのだが、何をどう頑張ればいいのかは「分からなかった (did not know)」(5)。アイダホ州のポカテロ (Pocatello) まで来たが、次に何をしたいのか「定かではなかった (wasn't sure)」(6)。ゴロツキ相手に勇気ある振る舞いをしたところを見込まれてインディアン居留地に連れて来られたが、「赤い男達」が自分に何を望んでいるのか「分からなかった (had no idea)」(12)。ややこしいことに巻き込まれる自分の運命を彼は「以前から理解できずにいた (had never been able to understand)」(16)。

引用が長くなったが、事程左様に「分からない」が連続的に照応しているようなヨジップのありさまをカスティールは「方向を見失っている」(Canada and Its Americas. 110) という言葉でまとめている。あるいは、別の論考では、父祖達の墓がある土地にインディアン達が密着しているのに対して、ヨジップは「周囲の環境と永遠に関係を持てない」(Second Arrivals. 76) 状態にあるとも述べている。ということは、ヨジップが自分に欠けていたと感じたもの

は、目的意識、思考力、関与であり、儀式を経てインディアンの一員になることで自ら獲得したものでもある。事実、ジョジップになった後の彼はヨジップ時代とは正反対の属性を発揮する。アメリカ軍との戦いのさなか、彼は、敵兵を最も効果的に倒すにはどこを狙えばいいかを部下に指示して回り、戦況に積極的に関与する中で「インディアンを守らねばならない」(79)という目的意識を強めていく。ジョジップ自身、「自分も敵を殺したかどうか分からなかった (never knew)」のだが、ヨジップ時代のように「分からない」で終わらせるのではなく、「殺したんだろうとは思ったが、それについては考えないようにした」(79)という形で締め括ることで、分からないことについても主体的な関与と総括を行うようになっている。上記のような態度はインディアン仲間達からの信頼へとつながり、身内に多くの犠牲を出しながらも彼らは酋長の「明敏さ」を称賛し、「通常、酋長は状況をありのまま正確に読み、かもしれない、といった判断はしない」(93)という評価を得るに至る。

このように、ヨジップとジョジップの間に存する対立のモチーフが「分からない」の連鎖をきっかけに明確化されることになる。

IV. インディアンとユダヤ人 (3) 一外的分裂のモチーフ

ジョジップとインディアン達の価値観や行動様式が全てにおいて一致している訳ではない。その対立点の最たるものは、作中何度も言及される「平和主義者」(3)としてのジョジップの志向と、時に残忍さをも厭わないインディアンの戦い方である。本章では、両者間で表面化した対立・分裂関係について特に見ていくことにする。

両者の対立とその後の部分分裂が最初に露わになったのは、フォックスグローブ(Foxglove)、スモールホース(Small Horse)、ウィンディーボイス(Windy Voice)という三名のインディアンが白人入植者を殺害した場面においてである。その入植者は「頭皮を剥がされた (was scalped)」(49)死体として発見

される。この場面で特徴的なのは、殺害方法が明示されていない点である。インディアンが頭皮を剥ぐのは何らかのやり方で殺害した後に行われることであって、剥ぐこと自体は殺害方法ではない。そうしてみるとこの場面では、殺害以上に、頭皮を剥ぐということそれ自体に焦点が当たっているということになる。この剥ぐ行為を抽象化すると、「人間の身体を頭皮とそれ以外の部分に分ける行為」と言うことができる。つまり、分裂のモチーフを具象化したイメージと捉え得る。

事件後、上記の関係者三名に対する尋問がジョジップの手で行われるのであるが、自らの行為について、スモールホースとウインディボイスは遺憾と謝罪の意を表するが、フォックスグローブはそれを拒否する。結局、フォックスグローブのみが部族から追放されることとなり、彼は、「お前への憎悪と共に俺は去る」(54)という台詞を残して離れていく。このように、頭皮を剥ぐという分裂イメージが、インディアン三名が二名と一名に割れる、一名が部族から離れる、というさらなる分裂を呼び起こしているのである。

同種のボタンをもう一例あげる。今後の部族の身の振り方についてジョジップが数人の有力者に意見を求めた際、ただ一人スプリットジャグ (Split Jug) のみが、別の安住の地を求めて今の居留地から「離れる (depart)」(57) ことを提案する。ただ、その直前、彼は、「岩が崩れてバラバラになった (the rock crumbled and fell apart)」(57) という、あまり話の本筋とは関係のない話題に触れている。この部分を意味づけるとすると、“depart” という分裂イメージの先触れとして “fell apart” が機能しているということになる。

いずれの事例においても、「I」で言及した、「分裂」の「照応」という現象を看取することができる。

一方で、殺害しても頭皮を剥ぐまでには至らない場面も存在する。「赤と黄色の縞模様」(59) を身体に塗りつけた六名のインディアンが入植者の老夫婦を殺害したのだが、その時にも殺害方法は示されていない。ただ、手を下した

者達は、「二人の頭皮を剥ぐことは控えた」(60)。その際のジョジップの意識は、実行犯たるインディアン達への批判というよりは、「自分は一級の酋長ではない」(60)という自己批判に向かう。六名のその後についても言及はない。つまり、殺害は行われても、頭皮を剥いだ場面に見られたような分裂イメージは継起していないのである。

もう一つ、アメリカ軍との戦闘のさなかに捕虜にした若い少尉に関し、「殺して頭皮を剥ぐ」(87) ようなことはするなとジョジップがインディアンに厳命する場面がある。結果、ジョジップは、対立しているはずのそのアメリカ兵から感謝の言葉を引き出している (89)。

このように、当然と言えば当然の話ではあるが、「剥ぐ」と「剥がない」は、単に行為としてだけでなく、その結果においても対立性を帯びている。

V. インディアンとユダヤ人 (4) — 内的分裂のモチーフ

インディアンとジョジップの間に齟齬が生じる原因の最たるものはジョジップの内部におけるインディアン意識とユダヤ人意識の葛藤である。卑近な例をあげれば、肉食主義者のジョジップにとって、バッファローを狩ってその肉を食べるインディアンの食生活は馴染めぬものがあるし、インディアンの吸う煙草のきつい臭いに我慢がならず、「マイルドな煙草の栽培」(55) を考えたりもする。あるいは、インディアンの言葉がなかなか身につかず、時にイディッシュで思考している。

ジョジップのユダヤ性についてエイヴリーは、「ユダヤ的背景は弱い」(Rev. 121)、と言い、逆にカスティールは、「明確なユダヤ的アイデンティティーを決して失ってはいない」(*Second Arrivals*. 77) と正反対のことを述べている。そもそもジョジップが肉食主義者になったのも、ユダヤ教の定めるところに従って動物を屠殺するショヘート (shochet) という「聖なる専門職」(42) に従事していた祖父の姿をロシアに居た頃に間近に見ていたからであり、また、

「部族」の一員になるために課された試練をユダヤ教の成人式であるバルミツヴァー (bar mitzvah) に例えることで、「それなら断るわけにはいかないな」(19) という姿勢を取るに至っている。「自分も神の子です」(36) という発言もある。このような状況を目にする時、少なくとも、ユダヤ的背景が弱いとは言えないように思う。

弓矢の腕を競う競技の最中に矢がかすめてヨジップの鼻を傷つけたというエピソードについては「I」で言及したが、正確に言うと、「彼の長い鼻の先端から小さな肉片が切り落とされた」(23) という表現になる。ここでも頭皮剥ぎと同種の分裂イメージが導入されており、この日を境にインディアンとユダヤ人という分裂した自我を抱え込むことになる彼の運命を象徴している。

次いで、インディアン問題担当長官に一部が欠けたこの鼻のことを指摘される段になる訳であるが、長官はヨジップがユダヤ人であることを即座に見抜き、「あんたが『先祖』と言う時、それはアメリカインディアンのことなのかヘブライ人のことなのか？」(32) という、ヨジップの自我の本質に迫る問いを突き付け、さらに、彼のことを「ヘブライインディアン」(33) と断じる。加えて、長官の娘ルシンダがヨジップに与えた花は「シャスタデージー」(33) であり、これはフランスギクとハマギクの交配種、つまり、二つの異なる系統を併せ持つ花である。このように、鼻の欠損から始まる形で、ヨジップの自我の分裂に関わる表現やイメージが次々と照応していくさまが見て取れる。このように、長官とヨジップの面会場面には、「優劣差の下にある対立」の照応、「分裂した自我」の照応、「赤」の照応といった様々な照応関係が流入しており、本作品の主題と表現に関わる重要な箇所であると言える。

自我の分裂はジョジップ自身が意識しているところでもあり、特にアメリカ軍との戦闘前にそれは著しい。ジョジップは、バッファローを撃ったことぐらいしか武器使用の経験がない自分にどうして戦争を指揮することができるのだろうかと悩むのであるが、バッファローを撃ち殺したその時でさえ、「祈りの

言葉を捧げたのだ」(70)と、ショヘートであったユダヤ人の祖父を意識しながら思う。同時に、「インディアンだから自分は戦うのだ」(70)という意識に突き動かされている。その緊張の果てに彼は嘔吐するのであるが、単にそれに留まらず、「そして、彼は吐瀉物の中に大麦の粒々 (grains) を捜し、少なからず見つけた」(70)という記述が続く。つまり、嘔吐という行為が読者にもたらす衝撃感を弱めかねない余計な接ぎ木のようにも見えるこの一文の付加によって、自我の分裂という内面の事象が粒々という形で具象化されることになり、分裂の照応というパターンがここで生起する。単に「大麦」ではなく、それを「粒々」と表現している所以はそこにある。

今の居留地を捨てる決断をしてカナダへと向かう「部族」とアメリカ軍との戦いの場面は生々しい。マラムッドとはほぼ同じ時代を生き、活躍した同じユダヤ系のアメリカ作家アーウィン・ショー (Irwin Shaw 1913-1984) が第2次世界大戦下の戦場を描いた長・短編を多く出版しているのと比べてマラムッドの場合、戦場を直接描いた作品はこれ一つと言っていいのではないだろうか。

戦いの危機が迫る中、「平和への思いを胸にたぎらせながらインディアン部族の中で暮らしている一人のユダヤ人に、戦士の長として何ができる？」(75)という自我の分裂に改めて悩むジョジップであったが、いざ戦端が開かれ、老若男女を問わずインディアン側に犠牲者が出だすと、ある朝彼は「走りながら目覚め (awoke running)」、「自分も撃つ」(78)という決意を固める。それは、前述の「インディアンを守らねばならない」(79)という意識につながるものであり、インディアンとしての自我がユダヤ人としてのそれに勝っている状態ともいえる。そのことを端的に示しているのは、ジョジップが実際にアメリカ兵に手を下す場面である。射殺されたワンプロッサム死体の辱めようとする若い兵士とそれを止めようとする上官に行き会ったジョジップは、上官の方を射殺し、若い兵士の方は逃げるに任せるという愚を犯す。ユダヤの聖職たるショヘートの祖父が見たら卒倒しかねないような不合理・不条理な殺害であ

り、しかもジョジップは、「すでに殺しは経験済みだ」(81) とつぶやくのみで、バッファローを撃った時のように祈りの言葉を捧げるでもない。戦闘前、アメリカ軍の追撃を意識しながらカナダへと急ぐ中たまたま安息日(Sabbath)に当たった時、ジョジップは、「今日は安息日だ。でも、安息日に休めば安息日に死ぬ可能性がある。だから、今晚はカナダへの道筋を辿って進むとしよう」(74)という判断を下す。これは、「人命が危機にある時には、それを救うために、たとえ安息日であっても可能な限りのことがなされねばならない」(Wigoder 818)というラビの教えに基づくものである。「III」においてヨジップとジョジップの対立関係に言及したが、ジョジップとなって以降に関しても、戦闘前のジョジップに見られたこのようなユダヤ的思考が戦闘中の先の行動と鋭く対立するものであることは明白である。

「部族」はアメリカ軍をいったんは撃退させるに至ったが、ワンプロッサムをはじめ多くの犠牲を伴った。そんな中ジョジップはワンプロッサムの遺体を抱き上げると「我が愛しい人」(81)とイディッシュで呼びかける。ユダヤ的自我の一時的な再発露といえるが、それを誰に聞かれたわけでもないのに、あたかもイディッシュによるこの発話に照応するかのように、その後出会ったインディアンヘッドからは「自分がインディアンと同等だと思ったら大間違いだぞ」(82)という苦言を浴びせられる。別のインディアンは、「インディアンヘッドが我々の真の酋長であるべきだ」(82)という口吻を漏らす。ここで、「IV」でも述べたようなインディアンと非インディアンという対立が一瞬顕在化してくるわけであるが、これと照応するかのように戦場では、他のインディアン部族が「部族」側の死者の「頭皮を剥ぎ、手足を切り落とす」(82)という修羅場が現出する。フォックスグローブの時や「粒々」の時と同じボタンで分裂のモチーフが照応している。

VI. 先行作品との照応関係

エイブラムスは、本作品と、先行する長編『修理屋』(*The Fixer* 1966)との類似性を指摘し、類似点として、「前者のインディアンも後者のユダヤ人も、主流をなす文化から見た寄る辺の無い集団」(140)であるということをあげている。また、どちらの作品の主人公も「抑圧された民の代表に否応なく選ばれた者」(140)であるとも言っている。また、エイヴリーは、長編第二作『アシスタント』(*The Assistant* 1957)と本作品を比較して、前者ではカトリック教徒がユダヤ人になったが後者では東欧ユダヤ人がインディアンになっており、そこに「新しいひねり」(Rev. 121)があると指摘している。先行作品とのそのような照応性、あるいは類似点、一致点について、ここでは、もう少し細かく、イメージや表記の点でのそれを探ってみたい。

ヨジップの赤い髭について筆者は、「I」において、「インディアンとアメリカという図式」の中で意味付けたが、その枠の外にある要素との照応関係にも着目したい。赤い髭というのは、『アシスタント』において、イタリア移民のフランク・アルパイン (Frank Alpine) が、ユダヤ人雑貨店主モリス・ボーバー (Morris Bober) に導かれる形で辿り着いたユダヤ的倫理観により人格的変貌を遂げたことを象徴する色である。(『アシスタント』における色彩イメージについては巻末の拙稿を参照。) それまでの、種々の悪徳に染まっていた頃の彼の内面を象徴していたのは黒々とした髭であった。エイヴリーが言うように方向性は逆かもしれないが、片やインディアン、片やユダヤという未知なものによる感化を表す色として赤イメージの機能は共通している。実際、酋長ジョゼフの死後ヨジップが「部族」を引き受けたのと同様に、フランクもモリス死去後の店を引き受ける。そして、モリスと同じやり方で店の切り盛りをする様子が描かれるが、ヨジップも、「ジョゼフ酋長がやれと言うであろうこと」(54)を行うよう心掛ける。

色彩イメージの照応についてもう一例、『フィデルマンの絵』(*Pictures of*

Fidelman: An Exhibition 1969) の一章をなす短編「女衞の復讐」(“A Pimp’s Revenge” 1968) に言及したい。『部族』においてそれと照応する場面は、「赤と黄色」(59) の縞模様を身体に塗り付けた六人のインディアンが白人夫婦を殺害した場面である。「女衞の復讐」では、イタリア人の女衞ルドヴィーコ(Ludovico) が商売上の相棒であるエスメラルダ(Esmeralda) をユダヤ系アメリカ人の画家アーサー・フィデルマン(Arthur Fidelman) に取られ、さらに、自分の仕事を道徳的でないと非難されて復讐を誓う。その復讐とは、フィデルマンが5年をかけてやっと完成させた作品「売春婦と女衞」を台無しにすることであった。ルドヴィーコは、善意の助言者を装って「少しのレモン色と少しの赤色」(145) を絵に加えることを提案し、それを受け入れたフィデルマンが修正を行った結果、絵は惨澹たるものへと変貌してしまう。「赤と黄色」が、片や一緒にいる白人夫婦を、片や絵の中の男女(This woman and man together 143) を同時に殺害するという筋書きにおいて両作品は照応を果たしている。

イメージに加え、表記の照応関係も瞥見したい。放浪中のヨジップはイシュメール(Ishmael) という名の馬に乗っているのであるが、イシュメールの片耳が不自由であるさまが「彼〔ヨジップ〕は、しばしば彼〔イシュメール〕に話しかけ、いい方の耳(his good ear)に向かってささやいた」(4) という言い方で示される。一方、『フィデルマンの絵』中の短編「裸のヌード」(“Naked Nude” 1963) では、イタリア人のやくざアンジェロ(Angelo) とその弟分スカルピオ(Scarpio) に囚われたフィデルマンが絵の贋作づくりを強いられるのであるが、ここではスカルピオの片目が不自由なさまが「彼のいい方の目(his good eye)」(69) という、イシュメールの場合と同じ文言で示唆される。一方、飼い主、雇い主の側はというと、ヨジップは「イディッシュ訛り」(3) という余分なものが加わった英語しか話せず、アンジェロは「二重顎(two-chinned)」(70)、つまり、本来一つのはずの顎に余分な顎が加わっている。このアンジェ

ロとスカルピオは実は愛人関係にあり、ヨジップもイシュメールに対して、「お前は自分の母親にとっては馬だろうが、俺にとっては大事な友達だぞ」(4)という特別な愛情を示す。このように、余計なものを抱えた主人と必要なものが足りない従者の間の懇ろな関係という同一のモチーフを両作品は照応させている。

「自分も撃つ」(78)、インディアンの大義に身を投じるという腹をジョジップに固めさせたきっかけは、「走りながら目覚めた (awoke running)」(78)ことであった。この言い回しは、前二作と同じく『フィデルマンの絵』に収められた「最後のモヒカン」にもそのままの形で現れる。ユダヤ人意識に希薄なユダヤ人フィデルマンがユダヤの歴史や価値観に初めて目覚めたさまが、やはり、“Fidelman awoke running”(36)という表現で言及されている。「最後のモヒカン」に関しては、「II」において、タイトルに見られるインディアンとユダヤ人の照応性ということで触れたが、作品内の重要な転回点で用いられる語句においても照応関係は看取されるということである。

このような作品同士の照応関係は他にも見つかるかもしれない。また、それを作者自身が意識していたかどうかは知るすがすがないが、テキスト間で交わされるこだまは、否応なく耳に響いてくる。

結び

以上、網の目のように入り組み、多様なテーマとの関わりで作用する「照応」・「一致」・「対立」・「分裂」のモチーフに乗る形で作品のストーリーが展開される様を見てきた。その複雑さを少しでも解きほぐして紹介することが本稿の目的である。

ところで、エイブラムスンも言っているように、マラムッドは、長編、短編を問わず、いったん書き上げた作品にとことん改訂を施すことで知られた作家である。それをできずに本人は亡くなったわけだが、その改訂不足は、「大雑

把な対話や、プロットを扱う作者の不器用さを読者に意識させてしまうようなやり方で各種の出来事を提供している点」(139)に見出せるとエイブラムスは述べている。筆者の目から見ても、インディアンにまつわる「赤」イメージの多用は少し煩わしく、その照応も類型的に過ぎるような気がする。

作品は16章で終わっているが、マラマッドは17章から終章たる21章までの構想をメモの形で残している。それによると、ジョジップは「部族」のための弁護士になることを志したり、ユダヤ教ハシド派の踊りを踊ったりするようであるが、興味深い展開で、完璧ないでたちの本作品に出会いたかったと思うのは筆者だけではあるまい。

引用・参考文献

- Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. Twayne, 1993.
- Avery, Evelyn, ed. *The Magic Worlds of Bernard Malamud*. State U. of New York Press, 2001.
- . "Rev. of *The People and Uncollected Stories* by Bernard Malamud." *Studies in American Jewish Literature*. Vol. II, No. 1 (Spring 1992): 120-122. (Retrieved December 4, 2022, <https://www.jstor.org/stable/41205817>).
- Casteel, Sarah Phillips. *Second Arrivals: Landscape and Belonging in Contemporary Writing of the Americas*. U. of Virginia Press, 2007. (Retrieved December 4, 2022, Google Scholar).
- . "Identity and Diasporic Belonging: Three New World Readings of Chief Sitting Bull." *Canada and Its Americas: Transnational Navigations*. Ed. Winfried Siemerling and Sarah Phillips Casteel. McGill-Queen's UP, 2010. 102-118. (Retrieved December 4, 2022, <https://www.jstor.org/stable/j.ctt80sfl>).
- Cohen, Eric, and Mitchell Rocklin. "The Jewish Tradition Unfolds in Fire. Here's How and Why." *Mosaic* (December 29, 2016). (Retrieved December 19, 2022, <https://mosaicmagazine.com>).
- Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. OUP, 2007.
- Lasher, Lawrence, ed. *Conversations with Bernard Malamud*. UP of Mississippi, 1991.

- Malamud, Bernard. *The People and Uncollected Stories*. Farrar Straus Giroux, 1989. Rinsen, 1998.
- . *A New Life*. Farrar Straus Giroux, 1961. Rinsen, 1998.
- . *The Fixer*. Farrar Straus Giroux, 1966. Rinsen, 1998.
- . *The Assistant*. Farrar Straus Giroux, 1957. Rinsen, 1998.
- . *Pictures of Fidelman: An Exhibition*. Farrar Straus Giroux, 1969. Rinsen, 1998.
- Werblowsky, R. J. Zwi, and Geoffrey Wigoder, eds. *The Oxford Dictionary of Jewish Religion*. OUP, 1997.
- Wigoder, Geoffrey, et al., eds. *The New Standard Jewish Encyclopedia*. 7th ed. Facts On File, Inc., 1992.
- Wouk, Herman. *This is My God*. Back Bay Books, 1987.

The Holy Bible. National Publishing Company, 1978.

島津 厚久 「*The Assistant* における『白』と『黒』—Frank の自己超越のプロセス」 『英語表現研究』 第 17 号 日本英語表現学会 2000 11-19

(しまづ・あつひさ アメリカ文学)